

基準4 学生の受入

(1) 観点ごとの分析

観点4-1-①： 教育の目的に沿って、求める学生像及び入学者選抜の基本方針等の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、学校の教職員に周知されているか。また、将来の学生を含め社会に理解されやすい形で公表されているか。

（観点到に係る状況）

<準学士課程>

学生募集及び入学者選抜に関しては、入学試験委員会において立案され、入学選抜の試験業務は教務主事室が中心となって実施し、合否判定は入試選考委員会が行っている。本校では、準学士課程において「アドミッション・ポリシー」を設け、入学者を選抜する際の選考基準として、重要視されている。準学士課程の入学者選抜に関わる「アドミッション・ポリシー」は、中学校に配布している学校案内・学生募集要項に明示し、ホームページにも公表している。また、入試PR活動の際に訪問する中学校、入試説明会の際に言及し、本校が求める学生像をできるだけ具体的に解りやすく説明しているため、社会に対する周知は充分行われていると認識している。また、教職員に対しては、ホームページでのアドミッション・ポリシーの掲載に加え、入学試験業務を全学一体となって行っており、その課程でアドミッション・ポリシーが教職員に対し周知されている。（資料4-1-①-1）

<専攻科課程>

専攻科の入学者選抜における基本方針としてのアドミッション・ポリシーは、専攻科全体と各専攻それぞれに定められている。近隣の高専（宇部，徳山，呉）への専攻科PRの際には専攻科のアドミッション・ポリシーを示した募集要項を配布している。さらに専攻科受検生への周知については、専攻科受検生は入学試験の際に行うプレゼンテーションの要旨及び自己PR文を、専攻科のアドミッション・ポリシーを参照して書くことが求められており、受検生自身への周知も行っている。（資料4-1-①-2）

（分析結果とその根拠理由）

<準学士課程>

本校では、「アドミッション・ポリシー」について、中学校を対象とした入試説明会、本校入学希望者を対象としたオープン・キャンパスなどで詳しく説明を行っている。入試説明会やオープン・キャンパスに参加した中学生の多くが本校を受検していることから考慮すると、本校の「アドミッション・ポリシー」は社会に充分に行き渡り、それが質の及び志向性の高い入学者の獲得につながっていると考えられる。

<専攻科課程>

専攻科のアドミッション・ポリシーは、本科及び専攻科の教育目標の内容及びキーワードが使われており、専攻科の教育目標に沿って制定されている。また教員会議において、全教員への周知がなされている。さらに本校ホームページ等で公表されており教職員、本校学生と保護者及び将来の学生が自由に見られる環境を整えている。また専攻科の受検生も願書作成の際、必ず専攻科のアドミッション・ポリシーを一読するようになっている。

観点4-2-①： 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿って適切な学生の受入方法が採用されており、実際の入学者選抜が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

<準学士課程・編入学>

(1) 準学士課程 (新入生)

本校の準学士課程入学選抜は、推薦による選抜及び学力検査による選抜の二つの方法が採られている。詳細はそのいずれについても学生募集要項に明記しているが、「アドミッション・ポリシー」は、どちらの選抜方法にしても重要視されているが、特に推薦選抜においては重要視される。

推薦における入学者の選抜は、「内申」「面接」「作文」が柱となるが、「アドミッション・ポリシー」はこのいずれの評価においても重要である。まず、出願書類の中には自己申告書として「自己アピール」の項目があるので、受検者は本校のアドミッション・ポリシーをよく理解した上で文章を書かなければならない。したがって、受検者は十分に理解していることにより、内申点が高くなるようにしている。このことは「アドミッション・ポリシー」が中学校を始めとして社会に広く知られている証明になり、選考時についても評価している。次に、「面接」においても、「アドミッション・ポリシー」を踏まえた質問が受検者に対してなされる。ここでは、本校の「アドミッション・ポリシー」をよく理解し、それに基づいた志望動機をはっきりと述べることで受検者が高く評価される。したがって、受検者が本校に入学するためには、本校の「アドミッション・ポリシー」を必ず熟知していなければならない。最後に、「作文」の検査においては、入試委員会においてあらかじめ決められたテーマが受検者に与えられ、600字以上の作文が要求される。そして、採点する側は、受検者が作成した作文を熟読し、本校のアドミッション・ポリシーに相応しい人間像の持ち主であるかどうかを判断する。したがって、ここでも「アドミッション・ポリシー」は受検者選抜における重要な役割を果たすこととなる(資料4-2-①-1)。

学力検査における選抜では、全国高専共通の入試問題によって選抜が行われるが、本校では、「アドミッション・ポリシー」がないがしろにしないように配慮している。学力選抜では筆記試験・内申点等による総合判定評価が高い者から順に合格させていくのは当然であるが、本校の「アドミッション・ポリシー」の中には「中学校で教わった基礎学力を身につけた人」という文言などがあるので、学力選抜においても「アドミッション・ポリシー」に基づいた入学者選抜が行われているといえる。

(2) 準学士課程 (編入学生)

本校の編入学試験は、「口頭試問」も含めた学力選抜(英語・数学・物理もしくは専門科目)のみである。ここで言う「口頭試問」とは、学力上の問題を口頭で質問するのみならず、本校への編入学を志望動機、すなわち受検生の学習意欲や人間性が浮かび上がると思われる質問もなされるので、試験官は受検者が本校の「アドミッション・ポリシー」に相応しい人物かどうかを探ることができる。したがって、本校では編入学試験においても「アドミッション・ポリシー」は十分に活用され、合格者を選抜するための重要なキーポイントとなっている。(資料4-2-①-2)

<専攻科課程>

専攻科における推薦入試では、受検生は専攻科のアドミッション・ポリシーに基づいたプレゼンテーション・面接と準学士課程における学業成績がアドミッション・ポリシーに定める学業優秀であるかについて審査される。(資料4-2-①-3)

専攻科における学力試験では、英語、数学及び専門科目の学力試験の合計点、準学士課程の学業成績及び受検生が専攻科のアドミッション・ポリシーに基づいたプレゼンテーション・面接を基に審査を行っている。(資料4-2-①-4)

学力試験問題については、専攻科のアドミッション・ポリシーにある学業成績の判定のために実施

され、受検生が専攻科に入学するに十分な学力を有しているかを判断する材料としている。試験問題の内容は、準学士課程における各分野（英語、数学、専門科目）の内容で作成されている。

（分析結果とその根拠理由）

＜準学士課程・編入学＞

本校の準学士課程においては、推薦選抜では「内申」「面接」「作文」のすべてにおいて「アドミッション・ポリシー」に相応しいかどうかということが合否判定の大きな基準となる。学力選抜では、特にアドミッション・ポリシーの中に「基礎学力」の項目に重点が置かれ、筆記試験・内申点の成績の高いものが基礎学力の修得者とみなされるので、「アドミッション・ポリシー」は選抜において重要視されている。

編入学試験においても、「口頭試問」と学力試験においてアドミッション・ポリシーに相応しいかどうか審査される。先述したように、推薦選抜と社会人特別枠選抜では「面接」と「プレゼンテーション」において、学力選抜ではこれに加えて筆記試験でアドミッション・ポリシーに沿った適切な選抜が行われる。

＜専攻科課程＞

専攻科の入試（推薦と学力検査）で行われるプレゼンテーションと面接で用いられるプレゼンテーション要旨は、受検生が専攻科のアドミッション・ポリシーを参考にして書くことが求められている。また面接に際しては受検生が書いたプレゼンテーション要旨を参考に審査が行われ、プレゼンテーション及び面接の内容が専攻科のアドミッション・ポリシーに合致しているかを試験監督者が評価する。また学力試験問題においては、専攻科のアドミッション・ポリシーに示している学力が十分であるかを判断するため、準学士課程で修得している内容を念頭にして作成されている。

専攻科委員会では、推薦ではプレゼンテーション・面接の結果及び準学士課程での成績を、学力試験では学力検査結果およびプレゼンテーション・面接の結果を基に受検者の合否を判断する。以上の分析結果より専攻科においてはアドミッション・ポリシーに基づいて入学者の選抜が適切に実施されている。

観点 4-2-②： 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿った学生の受入が実際に行われているかどうかを検証するための取組が行われており、その結果を入学者選抜の改善に役立てているか。

（観点到に係る状況）

＜準学士課程・編入学＞

（1） 準学士課程（新入生）

前項目において示したように、本校では準学士課程入学選抜は「推薦選抜」と「学力選抜」の二通りがある。先述したように、前者によって入学する学生には、面接や作文が課せられるので、推薦選抜による受検者は本校のアドミッション・ポリシーに沿った目的意識を持っているかはきめ細かに検査される。学力選抜による受検者は、本校のアドミッション・ポリシーの「中学校で修得すべき基礎学力を身につけたもの」という項目に本当に当てはまっているかどうかということ点を点検するために、毎年新入生に対して数学と英語の実力試験を行っている（資料 4-2-②-1）。

加えて数学においては、5年間の傾向分析を行っている（資料 4-2-②-2）

（2） 準学士課程（編入学生）

編入学生に対しても、4年生の担任が面談を行い、学生の志望動機について解析し、次年度の編入学試験の際の面接等に役立てるようにしている。また、高校までの学力点検としては、編入学生の単位取得状況などを点検しているが、特別に指導を必要とするような問題は発生していない。

<専攻科課程>

専攻科では、入学を許可した専攻科生がアドミッション・ポリシーおよび専攻科の教育目標に沿って学修しているか検証するために以下の点について専攻科委員会で点検を行っている。

1. 単位取得状況（資料4-2-②-3）
2. ボランティア・インターンシップの状況（資料4-2-②-4, 5）
3. 特別研究経過報告書の提出（資料4-2-②-6, 7）

専攻科委員会では、入学した専攻科生の単位取得状況や特別研究の進行状況を把握する体制をとっており、専攻科生がアドミッション・ポリシーに沿うよう専攻科生担当教員と協議をしながら専攻科生の指導を行っている。特に特別研究では、入学時に在籍2年間の研究計画の提出（資料4-2-②-6）および1年終了時および専攻科修了時に研究経過の報告書（資料4-2-②-7）を提出することを求めている。これにより専攻科委員会では入学した専攻科生の成績および研究状況を把握できる体制をとっている。これらは入学選抜方法の再考の資料となる。本学専攻科では、退学者や学位審査の不合格者は出ていないため、現在の選抜方法が十分機能していることを示している。今後の入学選抜の改善については、毎年、専攻科委員会で検討している。

（分析結果とその根拠理由）

<準学士課程・編入学>

準学士課程については、新生の各クラスの担任が中心となって、学生の目的意識に対する面談を行い、入学時の志望動機とその後の修学状況について把握し、入試委員会においてその結果が次年度の選抜試験に役立つようにしている。編入学生に対しても同様である。また、基礎学力を点検するために、毎年の新入生に対して英語と数学の実力試験を実施している。

<専攻科課程>

専攻科委員会では、学生の1年間の学修状況、特別研究の状況、ボランティアやインターンシップの実施状況を審議、それらがアドミッション・ポリシー及び専攻科の教育目標に合致しているかを検証している。また専攻科生の選抜および専攻科入試の際のプレゼンテーションの審査は専攻科委員で行っており、専攻科の在校生の状況を把握した上で、さらに入学志望者の学力検査の内容及びプレゼンテーションの内容がアドミッション・ポリシーに沿った内容であることを審査している。毎年、入学基準の見直しの検討等も専攻科委員会で行っている。以上によりアドミッション・ポリシーに沿った学生の受け入れの検証を行っている。

観点4-3-①： 実入学者数が、入学定員を大幅に超える、又は大幅に下回る状況になっていないか。また、その場合には、これを改善するための取組が行われる等、入学定員と実入学者数との関係の適正化が図られているか。

（観点到に係る状況）

準学士課程における定員は、各学科40名の計120名で、過去5年間、実入学者数が大幅に定員を超える又は下回る状況にはなっていない。（資料4-3-①-1）毎年、合格者のうち数名程度が辞退しているため、辞退者数を予測し、実入学者が定員を若干上回るように合格者を発表している。

専攻科課程における定員は、海洋交通システム学専攻4名、電子・情報システム工学専攻8名の計12名である。海洋交通システム学専攻については、過去5年間、実入学者数が大幅に定員を超える又は下回る状況にはなっていない。電子・情報システム工学専攻については、定員を超えている年度もある。(資料4-3-①-1)

定員を超えている件については、施設面では、ものづくり棟1Fオープンスペース(30名収容)、3Fマルチメディア室(20名収容)があり、特別研究を担当する教員も約30名と十分な数を確保している。また、平成20年以降、全ての専攻科修了生が大学評価・学位授与機構から学士の認定を受けていることから、学生の教育を適正に実施している。(資料4-3-①-2)

(分析結果とその根拠理由)

準学士課程においては、実入学者数は入学定員の120名以上を確保している。専攻科課程においても、定員14名以上を確保している。定員超過については、十分な施設・教員を確保し、学生に適正な教育を行っている。

(2) 優れた点及び改善を要する点

(優れた点)

・準学士課程、専攻科課程ともに定員を確保し、定員超過に対しても十分な施設・教員を確保している。

(改善を要する点)

該当なし

(3) 基準4の自己評価の概要

準学士課程、専攻科課程いずれにおいても、入学者選抜においてアドミッション・ポリシーを明確に定めている。また、ウェブサイト、募集要項、学校案内等により教職員、将来の学生を含めた社会に対して公表されている。

準学士課程においては、選抜基準にアドミッション・ポリシーを反映させており、それに基づいた選抜が行われている。専攻科課程においては、面接・プレゼンテーションにおいてアドミッション・ポリシーに沿った学生であるかを判断している。

準学士課程においては、基礎学力を図る実力試験およびクラス担任による面談により、アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入を確認している。専攻科課程においては、単位取得状況、ボランティア・インターンシップの状況、特別研究経過報告書により、アドミッション・ポリシーに沿った学生であるかを確認している。両課程において問題があれば、教務委員会および専攻科委員会によって審議され、学生の修学状況への改善が図られる。

過去5年間にかけて、準学士課程・専攻科課程はともに定員を満たしている。専攻科課程については、一部に定員超過が認められるが、十分な施設・教員を確保しており、学士取得状況をみても適正な教育がなされている。

